

①氏名 鈴木孝庸 題目：平曲譜本『吟譜』の息継ぎ点

②氏名：鈴木正美 題目：ウチヨーソフとテア・ジャズ — スターリン体制下のジャズと大衆歌謡（3）

(3) 国際シンポジウム「〈声〉の制度 — 継承・侵犯・障害 — PART2」報告集2013年11月刊行（新潟大学人文学部）

19世紀学研究

研究代表者 松 本 彰

1. 参加メンバー

松本彰（代表）

石田美紀

井山弘幸

城戸淳

桑原聡

佐々木充

鈴木正美

高木裕

高橋秀樹

逸見龍生

細田あや子

三浦淳

宮崎裕助

2. プロジェクト内容概略およびプロジェクトの進捗状況

平成24年度は、以下のとおり、シンポジウム、研究会を7回開催した。
シンポジウム・研究会の概要については、以下のとおりである。

① 研究会「韓国併合と冊封体制下の国家意識 — 近代に残存する前近代の名分」(2012年8月3日)

本研究会では、新城道彦(新潟大学大学院現代社会文化研究科助教)より韓国併合にみられる冊封体制の観念を、韓国側からの視点から分析した報告がおこなわれた。

新城助教は、日本と朝鮮の近現代史が専門で、2011年末に著書『天皇の韓国併合』を法政大学出版局より刊行している。

一般的に、韓国併合については、これまで日本側が国際法にのっとった条約締結につとめながら、他面で旧来の冊封体制観念にひきずられていた面が強調されてきた。これに対し、本報告では、むしろ韓国側の方が、冊封体制下の国家意識に大きくこだわっていたことが指摘された。その事例として、報告で挙げられたのは、条約締結にいたる交渉のプロセス、具体的には国号や王称、勅使差遣の際の面位をめぐる交渉などである。韓国側の姿勢と比較すると、日本はむしろ冊封体制を無意味なものとなしなしていたとのことであった。

この報告後、フロアとの質疑応答がおこなわれ、大韓帝国という国号の使用頻度やヨーロッパの帝国意識との比較、英語への翻訳問題などについて、さまざまな議論がかわされた。

② 学術講演会「都市の19世紀 — 西洋と日本」(2012年9月29日)

本講演では、白幡洋三郎(国際日本文化研究センター教授)より、日本と西洋の都市空間にみられる共通性、および違いについて、歴史的な観点から報告がおこなわれた。

白幡教授は、庭園研究の第一人者として知られるが、その研究対象は、博覧会から都市計画、社交場の研究など、きわめて多岐にわたっている。

報告者によれば、日本と西洋が、互いに庭園をはじめとする都市構造に注目するようになったのは、19世紀半ばの開国以後になるという。西洋人がおもに、日本の緑ゆたかな田園都市風景に着目したのに対し、日本人はレンガ造りの荘厳な建物に目をうばわれたことが、当時の見聞記や図版などをもとに説明された。その後、西洋はプレーメンのように撤去した城壁跡の緑化をすすめる一方、日本は西洋風の建築物をつぎつぎとたててゆくというわけである。

そうした意味で、日本と西洋がお互いに刺激をうけ、今日につながるような都市を形成していったという指摘は、ともすれば西洋から日本への一方的な影響に目をとらわれがちな中で興味深いものであった。

③ シンポジウム「〈封建〉を考える」(2012年12月15日)

本シンポジウムでは、今谷明(帝京大学文学部特任教授)と張翔(復旦大学歴史系教授)をまねき、「封建(feudalism)」概念について、それぞれ専門の立場から報告がおこなわれた。

今日、封建制という概念は、あまり注目されず、使用そのものを避けるような傾向がみられる。これに対し、今谷教授は、今こそ封建制を論ずるべきであると提起した。その上で、近世以来の「封建」にまつわる日本社会論について説明がなされた。

興味深いのは、「封建」に対する評価は、時代とともに二転三転していることである。今谷教授は、「封建」をめぐる議論の中で、これまで注目されてこなかった島崎藤村の日本封建論にみられる着眼点のするどさを指摘し、この西欧留学で得た着想が、『夜明け前』にもつながっていることを示唆していた。

今谷報告につづきおこなわれた張翔教授の報告では、日中知識人の「封建」認識に関する対比的な説明があった。

「封建」、すなわち「封邦建国」は、もともと政治権力の分権化した状態を表し、政治的な意味合いが強い語である。報告では、日中両国における「封建」、「郡県」をめぐるさまざまな議論が紹介された。柳宗元や荻生徂徠

のように、封建制を強く擁護する意見もあれば、顧炎武や山鹿素行のように、「封建」と「郡県」のよいところを折衷するような主張もあったことがくわしく説明された。

④ 学術講演会（2013年1月12日）

本学術講演会では、田中咲子（新潟大学教育学部准教授）と根占献一（学習院女子大学国際交流文化学部教授）より、それぞれ報告がおこなわれた。

第1講演の田中准教授からは、「古代ギリシア美術史研究の現在」について、ギリシアの墓碑浮き彫りにもとづいた報告があった。田中准教授によれば、19世紀より始まった墓碑研究は、形式、様式の変遷をもとに整理されてきたという。報告では、そのケーススタディとして、紀元前6世紀の「運動選手墓碑」について、豊富な資料を例示しつつそれぞれの特徴が説明された。この時期に現れた「運動選手墓碑」タイプが、その後にいる運動選手像のプロトタイプになっているとのことであった。

つづく第2講演では、根占教授が「ルネサンス・ヒューマニズムと近代」について、イタリアとドイツの視点から説明をおこなった。根占教授の専門であるイタリア・ルネサンス研究では、19世紀は何よりも、J.ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文化』初版が1860年に出た時代として位置づけられるという。ブルクハルトが生きた時代は、まさにイタリア統一運動、リソルジメントの時代と重なっていたのである。

根占教授によれば、ルネサンス、およびヒューマニズムという術語は、19世紀に生まれた新概念で、ドイツ文化に起源が求められるという。実際、これらの語に新しいドイツ的響きが付与されたことが、さまざまな事例をもとにくわしく説明された。

⑤ 学術講演会（2013年2月28日）

本講演会では、David Gilgen（ビーレフェルト大学歴史学研究員）をまねき、“Globalisation Angst. The Debate about the German Production Regime

between Fear and Transformation, 1870-2000.”と題した報告がおこなわれた。

Gilgen 研究員の専門は、経済史である。本講演会では、専門の観点から19-20世紀における Globalisation をめぐるドイツの論争が、Angst という概念をキーワードに説明された。講演は、報告ペーパーが用意され、英語でおこなわれた。

講演後、森田直子（立正大学非常勤講師）よりコメントがなされ、Gilgen 研究員によるアプライがあった。その後、フロアを交え、活発な討論がなされた。

⑥ 学術講演会（2013年3月8日）

本講演会では、François Pépin（リセ・ルイ・ルグラン校教授）をまねき、“Les savoirs et leur mise en perspective philosophique au siècle des Lumières（啓蒙の世紀における知とその哲学的表出）”と題した報告がおこなわれた。

Pépin 教授の専門は、フランスの百科全書研究である。本講演会では、専門の観点から百科全書にみられる知の態様について、ディドロとダランベールを中心に説明された。講演は、フランス語でおこなわれ、逸見龍生（新潟大学人文学部准教授）が通訳をおこなった。

Pépin 教授による講演後、参加者から質疑応答がなされ、百科全書から日仏の比較まで、さまざまな議論がかわされた。

⑦ シンポジウム「20世紀の戦争と国民国家 — ヨーロッパとアジア」（2013年3月18日）

本シンポジウムでは、松本彰（新潟大学人文学部教授）、谷喬夫（新潟大学大学院現代社会文化研究科教授）、早瀬晋三（大阪市立大学文学研究科教授）より、それぞれ専門の立場から、戦争と国民国家に関する報告がおこなわれた。

松本教授の報告「戦争と国民国家 — 19世紀と20世紀、ヨーロッパとアジア」は、「20世紀の戦争と国民国家」を問題にする前提として、ヨーロッパの1600年以降の近代国家成立過程をとりあげ、次に19、20世紀以降の戦争

記念碑を紹介し、さらに「国歌に歌われたドイツ」として、ドイツ、オーストリア、プロイセンの国歌を素材に、ドイツにおける国民概念の複雑さを説明した。

谷教授の報告「ナチ・イデオロギーと国民国家の解体」では、19世紀末以来のドイツ政治思想史を検討する中で、ナチズムがヨーロッパの人種イデオロギー的再編、広域秩序を目指すものだったとして、帝政期の右翼思想とナチズムの連続と断絶を問題にした。

早瀬教授の報告「東南アジアにおける二つの世界大戦と国民国家」は、東南アジアにおける国家意識を象徴するものとして、マレーシア国家記念碑（1966年）とそこに移築された戦争記念碑（1921年）を紹介し、東南アジアの歴史の複雑さを象徴する「マンダラ国家」の存続について説明した。

この3報告について、野村眞理（金沢大学経済学経営学系教授）が全体的なコメントをおこなった。これに対し、報告者がそれぞれリプライをおこなった後、フロアをまじえた幅広い、活発な議論が展開された。

3. プロジェクト成果の発表

19世紀学学会・19世紀学研究所『19世紀学研究』第7号、2013年3月